

## 大津港における外来魚釣獲駆除の実例

中村 聡一（琵琶湖博物館うおの会）

琵琶湖で釣りによって外来魚駆除を行っている、ギルの場合とくに同じ場所で際限なく釣れて、挙げ句の果てには翌日も全く同じように釣れ、キリがないと感じられることがある。また、いいポイントでは、一時的に居なくなるまで釣りきってしまったとしても、しばらくすると元のようにギルでいっぱい、という経験をされた方は多いはずである。そこで、今年5月から仕事帰りに大津港で継続的に釣りができる機会があったので、その結果わかったこと、疑問として残ったことを報告する。

2010年5月20日から8月30日までの間の35日、概ね17時頃から暗くなる前後までの2～3時間、初めは演者一人で釣っていたが、途中、会社の同僚数名が加わることもあった。硬調4.5mの溪流竿に0.6号の道糸、主に袖型針4～7号、ハリスは0.6～1.5号、ガン玉を付けた浮き釣りである。エサは、活きザリガニとソーセージを主として用いた。ザリガニが少ないときには、釣れたギルの切り身も用いた。また、ミミズやメバル用小型ワームも少し使用した。協力者の中にはワームで主にバスを狙う者もあった。調査項目は釣れた時刻と釣れた種類、体長を簡易測定器で5mm単位まで読み、最後にその日の全釣獲物重量をバネばかりで0.05kgまで計量した。

釣れたのはほとんどがギルで1871個体、バスは主にルアー釣りで47個体釣れたに過ぎなかった。全釣獲物重量は75.3kgであった。5月6月はギルの産卵期であり大型の個体が数多く釣れた。天気の良い日にはとくに夕まづめに大型個体が釣れる傾向があった。ただし、数多くの個体が水面に浮いてエサが来るのを待っているような状態にある日があったり、時には底に沈んでしまい活性が全く低い日もあった。

産卵盛期に大型個体が同じ場所で複数続けて釣れることがよくあった。ギルは産卵時にコロニーを作ることが知られているのでそのためであろう。

8月になり産卵期が終わりにかかると大型個体はどこかへ消えてしまい、釣れる個体の体長もずいぶん小さいものが多くなる。これらギルの季節移動はどのようなものであるかは疑問として残る。

同じ場所で継続して釣ってもギルの密度が低下したとは感じられなかった。